狐の面は月見て笑う

柚葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
狐の面は月見て笑う

【Ｎコード】
Ｎ３３６０Ｚ

【作者名】
柚葉

【あらすじ】
義賊：金持ちから金品などを盗み、貧民に与える賊。
義賊グループ「月夜」に所属する氷美は自分と紅い色が嫌いだった。理由は、戦うとやりすぎてしまうから。やりすぎたときの色が、紅だから…

＊連載始めました。冷やし中華っぽい言い方ですね；；

プロローグ

氷美(ひみ)は狐の面の下で笑った。
月光が降り注ぐ中、紅く染まった刀を振って。
紅葉色の地に、花のような紋が入っている着物。刀のように紅く染まったのが目立たないように。
でも氷美は、この着物が好きではなかった。
なぜか。
やりすぎてしまったことを自覚させる色。
氷美の嫌いな、赤。

知らない人は「殺人鬼」と。
知っている人は「義賊」と。
氷美たちは、そう言われる。
氷美は、やりすぎてしまうから。手加減ができないから。
氷美は、紅く染まってしまうのだ。
そして、氷美は。
紅く染まった自分の顔を見たくないからこそ、狐の面をかぶる。
恐れられることを恐れているから、やりすぎてしまう。
どうすればいいのかわからないから、操り人形のように、刀を振るうのだ。

?．制御？

氷美は義賊。
（義賊：金持ちから金品を盗んで貧民に与える賊。）
だが、氷美は単独で義賊の活動をしているわけではない。
５人のグループ、「月夜（げつや）」。
「あーあ、派手にやったな、氷美。」
氷美の背よりも５０？ほど高い塀を軽々と越えて来たジャージ姿の少年が苦笑した。
「…零（れい）。」
零と呼ばれた少年も、「月夜」の一人。
氷美よりも一歳だけ年上で、それだけなのに威張るというのがものすごくいらつくやつだ。
「氷美もさ、やりすぎないようにできないわけ？」
「できたら、とっくの昔にやってるわよ…。」
喋るのは久しぶりな気がした。日本刀を使っているときは、時間が長く感じられるのだ。
感じられるだけじゃないのかもしれないけれど、もう慣れた。
「どうでもいいけど、零。」
「あい？」
「私がやりすぎるのを、黙ってみていたというの？」
氷美は、自分がやりすぎること、誰かにとめられないと相手の息の根が止まるまで戦うことを知っている。
もちろん零も、知っているはずなのに。
「あ、いやー…それは、さ…。」
「黙ってみてたんでしょう？」
やりすぎてしまう自分が、大嫌いだった。
だからやりすぎそうなときはとめてくれと、月夜の全員に言った。
「……悪い。」

ややあって、零が頭を下げた。彼曰く、氷美のやりすぎたときの強さがとめるほどのものなのか品定めしたらしい。
「……」
「…氷美？」
「ふっざけんじゃないわよ！」
「ちょ、氷美！仕事！騒ぐとばれる！」
「あんたが悪いのよ、零。」
「だから、悪かったって！」
「悪かったですむ話じゃないのよバカ！」
「じゃぁどうしろってんだよ！」
「そんなの私が知るわけないでしょ！」

「私、帰る。零一人でやって。」
「え、ちょ、氷美！？」
零が後ろで呼び止める声がする。
知ったことか。あいつが悪いんだ。そう腹立ち紛れに思う。
氷美は日本刀を持ち、いつの間にか落としていた狐の面を拾う。
「少し、汚れた……。」
自分で言って、吐き気がした。
その紅い汚れは、氷美がやりすぎてしまった証拠となる。
氷美は、どこで道を間違えたのか。
あの、孤児だった頃から間違えてたというのならば。
氷美は一つため息をつき、知ったことか、と心の中でもう一度呟いた。

?・制御？

少し腹が立ったまま、氷美は門の出口へと向かう。
悔しいが、零のように塀を飛び越えることはできないのだ。
仕事は明日実行することになる。
「…や、氷美って！」
後ろからまだ零の声が聞こえる。
「待てっつってんじゃん！」
しつこいなぁと氷美は思った。自分のせいだから必死で追いつけよ。
「このっ……やりすぎ女！」
ぶちっ
「好きでやりすぎてるわけじゃねーよ！」
やりすぎ女だと？
こっちだってやりすぎて後悔してるんだよその後悔のネタを一つ増やしたのもお前が原因だろうがそれなのにお前がそう言うこと言う権利があるのか！？
「や、だってお前がとまんねーんじゃん！」
「お前と話す気ないんだよ。あんた一人で仕事やれば？は、どうせ私はやりすぎますよ、やりすぎる私は不要ですと？じゃぁおまえ一人でやってみればいいじゃん。ちゃんとできるんならね！」
「いや、そこまで言ってないんだけど。」
「私にとってはそれと同じなんだよ！」
零は落ち着きまくっている。それがまたいらつく。
そうやって零とのケンカに氷美は集中しすぎた。
「…誰か、いるの…？」

?・制御？

零と氷美とで取っ組み合った状態のまま、おそるおそる声がした方を見た。
「そこにいるの、だれ…？」
6歳ぐらいの、少女。
「…零！」
「おい！なぜそこで俺に矛先が向くんだよ！？」
「もとをたどればあんたのせいじゃないのよ！」
2人は心なしか顔が青い。
そりゃそうだ。
義賊なのに完全に見られたとならば失格。
しかもさらに、それは自分たちのケンカのせいとか言ったらもう終わり。
義賊グループ「月夜」の名折れ……。
「ど、泥棒！？」
彼女の声が恐れのせいで小さいことが幸いだった。
だが。
「泥棒なんでしょ！う、家のお金は、盗んじゃダメよっ！」
そう言うなり、足下に落ちていた木の枝を拾って闇雲に振り回しながら襲いかかって（？）きた。
「出ていってよっ！」
「な――――――」
急にそんなことをされると思っていなかった氷美は、避けるのが遅れた。
「やぁぁっ！」
少女が叫び、振り下ろした枝が、氷美の頬をかすめる。
「っつ……」
鋭い痛みが走り、そこから血があふれた。

小さい傷だったが、氷見の目に映ったのは。

嫌いな、紅。

だめだ――――また、やりすぎてしまう。

?．制御?～零side～

氷美は無言で日本刀を抜いた。
――――やばい。
零は直感でそう判断する。
とめなければ……！
「なん、だよ…！」
足うごかねぇし。怖いのかよ！
「零」
氷美が、静かに呼ぶ。
さっき零とケンカしていたときの声とはぜんぜん違っていた。
「邪魔、しないで。」
冷ややかな声。背筋が凍るような。
氷美を傷つけた少女は、その様子を見てふるえていた。
木の棒を手が白くなるほど強く握り締めて。
「あ…あ、」
声にならない声を出していた。
そりゃ怖いよなぁ、と零は冷静に分析してしまう。
だって、俺だって怖いもん。
「氷美、今度こそ止めねぇと俺殺されるよな…。」
俺、まだ死にたくねぇよ？
零の思考がそこまで達したとき、氷美が日本刀を構えて走り出した！
「うげっ」
零は慌てて追いかける。
氷美は、やりすぎたことをひどく根に持ち、下手したら自分の命を差し出してでも罪を償おうとする。
当たり前といっちゃ当たり前のことだが、こんな幼い少女を。
自分の体験したことをさせるとなれば。
氷美は――――――――――

「やめろっ、氷美！」
零は、追いつけなかった。
紅い、血が、舞う。
零はそれを見たくなくて、固く目をつぶった。
だけど。
血が舞う音の変わりに。
きぃ――――――――ん
と、金属音がした。
「……氷美？」
おそるおそる目を開けると。
長身の人が素手で氷美の刀を押さえている。
それを片手ですませ、もう片方の手で速やかに少女の首に手刀をたたき込んだ。
黒のコートに、首の後ろで結わえた夜空色の髪が揺れる。
「…なっ、朔さん！？」
その人は糸目を面白そうにさらに細めて言った。
「零くん？とめなかったのなら、お仕置きだよ？」

「ウソだろ…。」
この朔という青年、「月夜」のリーダーであった。

?．制御?〜零side〜

「さ、朔さん？お仕置きって何するんすか。」
零は死にたくないという思いが強まったあまり、氷美のことを放ってそのことを聞く。
気を失った少女を木陰に置くと、朔は困ったように眉を寄せた。
「君ね、もう少し氷美のことを考えてあげないの？」
「…ふっ、死にたくないのは誰でも当たり前でしょう。」
無意味にカッコつけてみる。
ちなみに、朔はまだ氷美の剣を押さえつけている状態。
その状態でよく話せるなぁと心の片隅で思ったのはおいとくとして。
「…氷美、どうするんですか？」
「ん、どうするって？」
さっきから氷美は動かない。
朔を睨みつけているように見えるが、いつもの氷美ならそんなことしないし。
やりすぎる状態では自分を失っている…そんな感じだと零は勝手に予想した。
「剣そのままじゃないすか。」
「あぁ、それ？気を失わせた方がいいかねぇ？」
知るか。
なんか朔のこういう態度がいらつく。
零は自分の指が無意識に動いてしまったのを見ないことにした。
零は鋼糸（こうし）（糸型の剣みたいなもの）を使って戦う。
右手の中指が動くのは、本気になった零が「片づけ」をするときの仕草。
いや、今動いたのは左の中指。
だったら大丈夫だ。それに今は鋼糸を身につけていない。
身につけていたところで朔を倒せるわけでもないが。

「あ、零くん。今僕に殺気をむけたね？」
だってこの人は、どんなにうすい殺気でも気付いてしまう。
「気のせいでしょう。」
「君が言った気のせいが本当に気のせいであったことがないけどね。」
長くて理解しにくいセリフだったから、零は聞き流した。
「じゃ、ごめんね？氷美。」
朔は剣をむけてくる氷美の鳩尾に拳を入れた。
かわいそ。
たぶんこれは、朔のお仕置きである。
いつもなら朔は首筋に手刀をたたき込むだけで気を失わせるが。
鳩尾なら、痛みとか…たまに吐き気を感じたりもする。
え、じゃぁ俺ってもっとひどいお仕置きさせられるの？
やばい。
考えただけで気が遠くなった。
「零くん？」
「…はい。」
朔は何を考えてるのかなぁという笑顔で聞いてくる。
表情がわかりやすくて怖い。
「いーえ、なんでもないです！」
「じゃ、ここの仕事は近いうちにやるということで。」
「は？え、なに、帰るんすか。」
「当たり前。君も氷美も、しつけ直したほうが良さそうだしね？」
零は無言で朔の後に続いた。
こういうことがあるから、この人は月夜のリーダーになれたんだと思う。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3360z/

狐の面は月見て笑う

2011年12月17日20時50分発行